



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第八三号）

小満 しょうまん

五月二一日



フィトンチッド

五月の風は薫風くんぷうと呼ばれるほどに、格別なもの。もともとは花の匂いを運ぶ春風をさしましたが、近世以降は、青葉の中を吹き抜けるすがすがしい風という認識が定着しました。この風の香りの正体が主に樹木が作り出すフィトンチッドです。近頃では、森林浴が注目されるようになり、この言葉もよく聞かれますが、実はその仕組みについて私もよく知りませんでした。

フィトンチッドは、植物が光合成を行う際、炭酸ガスと水から酸素を作り出し、放出しますが、その時に二次的に生み出す成分なのです。根を張る植物は動けないため、外敵からは逃げられません。自らの身を護るまもる自衛手段のために殺虫、殺菌を行う成分を作り出しているのです。

フィトンチッドの力は、植物の勢力争いにも一役買っていました。他の植物の成長を妨げる物質にもなり、自らの勢力を拡大していくのです。野原などで、セイダカアワダチソウやススキが一面を覆っていたりするのも、このフィトンチッドの力を發揮し、生存競争に勝ったからなのです。森林や野原では激しい植物の競争が展開されていたのでした。

この植物の力は、一九三〇年に旧ソ連で発見され、フィトン（植物）、チッド（殺す）と名付けられ、日本には昭和五五年（一九八〇）に書籍で紹介され、一般的になりました。ですが、日本では昔からこの力をうまく利用してきました。ヒノキやヒバの防虫効果を利用した木造の家や風呂、柿の葉でくるむ寿司、お刺身の大葉などなど。もちろん、緑の森に鎮まる神社に詣でることも、またフィトンチッドの効果が得られます。新緑の美しい季節、神宮の森はフィトンチッドに満ち満ちています。

文 千種清美